

漢法苞徳塾資料	No. 154
区分	診察論・脈診
タイトル	診察における脈診の位置
著者	八木素萌
作成日	

◎診察における脈診の位置の問題

- (1) 脈診は非常に重要であるが、あくまでも四診（望診・聞診・問診・切診）の一部である。
そして切診の構成部分（視る＝経脈走行上の形や色調・紋様・乾燥度や湿潤度や緊張度・キメ・など、撫循・擦循・撮按する、脈拍を感知する）である。
- (2) 「脈は唯一の体内情報である」と言うのは偏った認識である。舌も・舌下（＝舌裏）の静脈も・唾液も・体表温度（特に穴位の温度）も・表面の陽絡の様子も・体表形状も・透けて見える皮下静脈も・匂いも・体の発する種々の音も・その他の種々の象徴も、要するに体表に出現している生理的病理的な全ての反応は、「体内情報」である。漢法医学は「象」の意味するところを精緻に把握する面が非常に発達している事、その土台には「東洋的」な文化・発想があることを知るべきである。
- (3) 「証」の決定は、四診の結果を、総合し・分析し・推理し・比較対照し・帰納し・或いは演繹する等の、論理的な整理加工の後に行なうべきである。病因・病位・病の性質・病の段階・病の順逆・予後などが視野に入っているから「証」が決定されれば、適切な治療方針を立てることが出来、適切な治療が出来るのである。
- (4) 四診の結果が少しも互いに矛盾すること無く説明出来るように病像を描き出せるならば、その「証」決定は基本的には正しいのであるが、治療の結果と予後の観察と言う検証を経て、初めて最終的に、正否を判定できるのである。
- (5) 脈診はその結果を、他の診察法による結果と、比較対照する事によって、病の順逆・病因・予後・生死が判断出来るのである。この点に脈診の診察法上の意味と位置とがあるのである。
- (6) 現代中医学では「脈に従う」場合と「症に従う」場合とがあると言うが選択基準が必ずしも明快ではない。とは言え、温病論の成立から完成にいたる過程で、ほぼ成立しているのは、「外感病は脈」（但し、温病は別）・「内傷病は証」と言う合意である。李中梓『医宗必读』に良論がある。

註＝李中梓の論の要旨は